

入選

駒村 実咲 (こまむら みさき) みなみ野君田小 6年生

作品名：障がい児3兄弟物語を読んで

図 書：目がみえない耳もきこえない でもぼくは笑ってる

佐々木家には三人の兄弟がいて、それぞれ障がいを持っています。この物語は、洋平のお母さんが障がいで話すことが出来ない洋平の気持ちになりきって書かれた作品です。きっとお母さんは、話すことが出来ない洋平がこんなことを思ったんだろうな、こんなことを伝えたかったんだろうな、と思いながら書いたものだと思います。生まれた時から脳の半分がなく、足もほとんど動かず、耳も聞こえず、目も見えない重い障がいを持った長男の洋平。次男の夫は自閉症で、三男の航は知的おくれの自閉症です。

洋平が十八才の時、呼吸がうまく出来なくなってしまい

「気管切開をしないとだめです」

と主治医の先生に言われ、手術でのどを切ってしまいます。しかしその後、一度だけ

「お母さん」

と言うことが出来ました。それからは二度と話すことが出来なくなってしまいました。生まれてきて一度も話すことが出来なかった洋平が、声をなくす前にたった一度だけ話すことが出来たこの場面が、一番私の心に残っています。これはきせきではなく、きっと最後まであきらめない気持ちが強かったからだと思います。洋平の強い気持ちがどんなことにも勝つことが出来、かっこいいなと思いました。

私と洋平を比べてみると全然ちがいます。健康で何の不自由もない私と、七万七千人に一人しか生まれず、一秒一秒障がいと戦っていかないといけないとても重い病気を持っている洋平。そこで、洋平のお母さんはどのように感じていたのか疑問に思いました。大変でつかれていても、一生けん命世話をして大事に大事に育てていたと思います。

自閉症の人は、「死ね」と言われると本当に信じてしまう人がいるそうです。私は、弟にじょうだんで「死ね」と言ってしまうことがあります。しかしこの本を読んで、弟が自閉症ではないから簡単に悪口を言うことが出来るのだと思いました。これからは、じょうだんでも口には出さないようにしようと思いました。

洋平のお母さんが読者に言いたかったことは「生きづらさ」というものは「く

じ引き」だということだと思います。障がい者の子供を産みたくて産んだわけでもないし、子供だって障がいを持って生まれたかっただけでもありません。洋平のお母さんは三回もそのくじに当たり、おどろきました。くじに何回当たったとしても幸せに生きていくことが出来て、とてもすばらしいと思いました。子供はどんな障がいを持っていたとしても、みんなから愛され、かわいがってもらえます。洋平のお父さんやお母さんも三人の子供達をととてもかわいがり、大事に大事に育てていました。

私の将来の夢は、人の命を助ける仕事につくことです。病気を持った子供が、この先何人何十人生まれてくるか分かりません。その時には、一人でも多く助けてあげたいと思いました。

この本を手にとって読んでいくうちに、私は洋平のお母さんに勇気づけられました。しかし本当は、洋平の気持ちになって書いているお母さん自身が自分を勇気づけるために書いた本ではないかと、私はそう思いました。私や世の中の人が、洋平のお母さんのような経験をしないとは言えません。しかしこの本を書いたお母さんが言っている通り、どんなくじに当たったとしても、強い心を持ってがんばっていれば、きっと大丈夫だと思います。どんなことがあっても、世界中のたれもが幸せになって、世界が愛にあふれるようになってほしいと思いました。